

和文誌「生物と気象」の冊子体発行にあたって



日本農業気象学会会長

大政 謙次

日本農業気象学会の会長を引き受けて、この3月で4年になります。会長就任挨拶の際に、英文誌「*Journal of Agricultural Meteorology (JAM)*」の Web of Science (Science Citation Index, SCI) (旧 ISI 社、現在は Thomson Reuters) への登録を一つの目標に掲げました。この目標は編集委員会 (平野高司委員長) の尽力で達成され、2016年6月に impact factor (IF=0.467) がつきました。これとは別に、科学者、研究者向けのソーシャル・ネットワーク・サービスである ResearchGate でも過去の IF を知ることができますが、0.30 (2004), 0.39 (2012), 0.60 (2013), 0.69 (2014), 0.49 (2015) と、ここ数年、徐々に上がってきています。2015年に少し下がったのは、SCI登録に向けて積極的に論文数を増やしたために、母数が増えたためと考えられ、SCIのIFも、実際にはもう少し高いのではと思っています。今後は、その方向性の議論は必要ですが、過去の慣例にとらわれず、学会誌としての「JAM」の編集に積極的に協力していただける優秀な外国在住の日本人会員や外国人会員を編集委員や編集顧問に招き、一流国際誌に相応しい適切な編集体制と編集方針を漸進的に確立していくことにより、70余年にわたる「JAM」の伝統とこれまでの国際的な実績を考えれば、将来、この分野の代表的な学術誌である *Agricultural and Forest Meteorology* (IF=4.46 (2015/2016)) に肩を並べ、さらにそれを超えることも夢ではないのではと考えます。

一方、学術賞と普及賞が同等の権威ある学会賞としての位置づけがあるように、学会誌にも学術的な側面と普及啓蒙的な側面があります。これは、農業気象学が農学の一分野であり、現場で役に立つための実際科学であるためです。学会誌「農業気象」は、私が編集委員長兼学会誌検討委員会委員長であった2000年に、IFの取得のために論文誌「農業気象」と情報誌「生物と気象」に分離するとともに、外国の著名な研究者に編集顧問をお願いしました。当時は、広報記事が多くを占め、Web of Scienceへの申請には、論文誌として独立させる必要があったためです。また、英文誌を出すには時期尚早であり、日本語を含んでも採択される可能性があるという判断からの多少無理をした選択でした。その後、日本学会事務センターの破産による財政問題など紆余曲折はありましたが、2006年に、当時、私が委員長をしていたあり方委員会と編集委員会 (小林和彦委員長) との合同合宿での学会誌の方向性の議論を経て、北野雅治委員長の下で2011年から、「農業気象」の英文誌「JAM」としての発行が実現しました。

一方、「生物と気象」は、分離当初、井上君夫副編集委員長に編集責任者になってもらい、カラー表紙立てで発行しました。しかしながら、日本学会事務センターの破産の余波による財政的な問題と英文誌の発行のための財源捻出のために、2006年の合同合宿での議論に基づき、2007年から情報誌として電子化し、2011年から電子版の和文学術誌に変更しました。このため、会員の皆様の手元に届く学会誌は、英文誌の「JAM」のみで、学会の重要な構成員である現場で農業気象の普及活動を行っている会員の皆様に対して、

十分なサービスを行えていないという反省がありました。学会規模から、英文誌と和文誌の両方を冊子体で発行するのは、財政的な困難を伴いますが、理事会及び編集委員会での審議を重ね、また、財政的な裏付けをとった上で、本号（17巻1号）より、和文誌の冊子体での発行を決断しました。このため、長年お世話になった養賢堂から、発行先と事務局を印刷会社である西村謄写堂に変更しました。会員の皆様には、しばらくの間、色々ご迷惑をおかけすることになると思いますが、和文編集委員長に小南靖弘現編集副委員長を、また少し高齢の体制にはなりましたが、編集委員に岡田益己前会長や小沢 聖副会長など経験豊富な方々にも就任頂き、和文論文に加えて、解説や広報記事など、現場で役に立つ様々な企画を行っていく予定ですので、ご理解と、更なるご支援を宜しくお願いします。なお、学会の通常業務の他に、事務局・編集業務の委託先移行の担当として、荊木康臣前総務理事（総務担当）と谷 晃理事（編集担当）に就任頂き、また、松岡延浩、廣田知良総務理事をはじめ多くの役員の方々に、スムーズに移行が完了するように尽力頂いています。

私は、任期満了により、この3月の総会で会長を退任することになります。学会としての長年の懸案を微力ながら少しでも実現できたことは、学会役員の方々に加えて、学会活動を支えて下さっている会員の皆様のご支援によるものと感謝をしております。今後、英文誌と和文誌が、その与えられた役割を果たし、会員の皆様にとって、有益な情報源であり、また、資産となるように育てて頂き、学会の更なる発展の礎になればと願っています。

最後に、学会としては、学会誌だけでなく、図書の出版や International Symposium on Agricultural Meteorology (ISAM) の漸進的發展、若手人材育成や普及啓蒙のための企画、ホームページやソーシャルネットワークによる情報発信などにも力をいれていければと考えています。このための第一歩として、和文誌の冊子体での発行に加えて、現在、75周年を記念した出版事業と学会発祥の地である九州大学での記念大会（2018年3月）の企画を、理事会で審議しています。また、これまでの学会活動の歴史を、ホームページの更新と併せて、徐々にではありますが整備していければと考えていますので、今後ともご支援を宜しくお願いします。最後に、長年、学会誌の発行と事務局業務でお世話になり、移行業務にも誠意を持ってご協力いただいている養賢堂の及川清社長と関係者の皆様には、引き続き図書の出版などでのご協力をお願いします。感謝の意を込めてお礼を申し上げます。